

A Candy

On a warm day in Spring, a woman traveler and her two children got on a boat.

When the boat was about to start, a samurai ran toward it from the opposite of bank, waving his hands,

“Hey, wait just a minute!”

He jumped into it.

The boat departed.

He sat down in the middle of the boat. It was such a warm day that he soon fell asleep. As the beard samurai who looked strong nodded off while sleeping, the children couldn't help at his funny gestures.

The mother said to them, putting her finger to her lips, afraid that the samurai would get angry.

“Be quiet!”

The children got silent.

After a while, the boy said, holding his hand out,

“Mom, give me a candy.”

Then the girl said,

“Mom, give me a candy, too.”

Their mother took a paper bag out from the front flap of her kimono. There was, however, only a candy left.

“Give it to me.”

“Give it to me.”

The two children begged her at the same time. She was embarrassed because she had only one candy.

“You are good, so wait. I'll buy it when we reach the opposite side.” She persuaded. But they kept on whining.

The sleeping samurai opened his eyes and watched the children begging their mother persistently.

She was surprised to see the samurai and thought that he must have been angry because he had his sleep disturbed.

“Be quiet!”

The children never listened to her though their mother soothed them.

Then the samurai suddenly pulled his sword out and stood in front of them.



The mother got so pale and protected her children, thinking that he would slash and kill them because they disturbed his sleep.

“Take out the candy.” The samurai said.

The mother took it out fearfully.

He put it on the edge of the boat and broke it with the sword into two pieces

“Here you are!”

He gave them to both of them.

He returned to the former place and began to sleep again.

(2023.2.5 Kudo: Original by Niimi Nankichi)

飴だま

新美南吉

春のあたたかい日のこと、わたし舟に二人の小さな子どもをつれた女の旅人がのりました。

舟が出ようとする、
「おおい、ちょっと待ってくれ。」
と、土手の向こうから手をふりながら、侍がひとり走ってきて、舟にとびこみました。

舟は出ました。

侍は舟のまん中にどっかりすわっていました。ぽかぽかあたたかいので、そのうちに居眠りをはじめました。

黒いひげをはやして、つよそうな侍が、こっくりこっくりするので、子どもたちはおかしくて、ふふふと笑いました。

お母さんは口に指をあてて、
「だまっておいで。」
と言いました。侍が起こっては大変だからです。

子どもたちは黙りました。
しばらくすると一人の子どもが、
「かあちゃん、飴だまちょうだい。」
と手を差し出しました。

すると、もう一人の子どもも、
「かあちゃん、あたしにも。」
と言いました。

お母さんは懐から、紙の袋を取り出しました。ところが、飴だまはもう一つしかありませんでした。

「あたしにちょうだい。」
「あたしにちょうだい。」

二人の子どもは、両方からせがみました。飴だまは一つしかないので、お母さんはこまってしまいました。

「いい子たちだから待っておいで、向こうへ着いたら買ってあげるからね。」
と言ってきかせても、子どもたちは、ちょうだいよオ、ちょうだいよオ、とだだをこねました。



居眠りをしていたはずの侍は、ぱっちり眼をあけて、子どもたちがせがむのをみていました。

お母さんは驚きました。居眠りをじゃまされたので、このお侍は怒っているのにちがいない、と思いました。

「おとなしくしておいで。」

と、お母さんは子どもたちをなだめました。

けれど子どもたちは聞きませんでした。

すると侍が、すらりと刀をぬいて、お母さんと子どもたちの前にやってきました。

お母さんは真っ青になって、子どもたちをかばいました。居眠りのじゃまをした子どもたちを、侍が切り殺すと思ったのです。

「飴だまを出せ。」

と侍は言いました。

お母さんは恐る恐る飴だまを差し出しました。

侍はそれを舟のへりにのせ、刀でぱちんと二つに割りました。

そして、

「そおれ。」

と二人の子どもにわけてやりました。

それから、また元の所にかえって、こっくりこっくり眠り始めました。